

ハネムーンのためにお金を貯めた。
全部、Sな彼女とエーゲ海に行くためのお金。
彼女の笑顔さえ見られるのなら……。
そう思ってお金を貯めた。

しかし僕を待っていたのは、彼女の笑顔ではなく。
見知らぬ金髪美女。

「男なら、これで勝負でしょ？」

金髪美女はさも当たり前のように、服を脱ぎ捨てた。
彼女もそれに従い、全てを脱ぐ。
僕はどうして良いか分からず、ただただ立ち尽くしていたが、
なんだか負けたくないという気持ち湧いてきて、
とりあえず全裸になった。

僕が裸になって、彼女が全裸になって、金髪美女が全裸になって。
そうしてようやく僕は、金髪美女がいう
『これで勝負』の意味がわかった。

つまり、こういうことだったんだ。



「うっそ！マジ？マジでこのサイズなの？
ち○こ小さいとかそんなレベルじゃないじゃん。
見なよ。女王様のおち○ポ！
極太で超反り返ってるでしょ？
あれがおチ○ポっていうものなのよ。
アタリのは、ただの”オマケ”じゃん（笑）」



キヤハハハハ
小っちゃーこ(笑)
何んが、おチ○ホん

金髪美女はフンと鼻を鳴らすと、勝ち誇ったように顎を前に突き出し、目を細めて笑った。僕は殴ってやろうと思ったけど、自分と相手の体格差を見て諦めた。『喧嘩でも勝てそうにない』そう思ったからだ。自然と俯いてしまって、彼女の笑い声が心に突き刺さる。



喧嘩でも勝てそうにない圧倒的な体格差。
女の立場で見たらどっちを選ぶか明確に分かるおチ○ポサイズ。
そして何よりも女性が尊ぶ「自信の滲み出た顔つき」。
金髪美女の持っているソレラに、僕は何一つ勝てない。
そう思ったなら、急に恥ずかしくなってきた。
おチ○ポが少しだけビクンって揺れた。



マァン(呆)

認めちゃいなよ!!
ねえねえ(呆)

負け、ただね?

「あれあれあれ〜のの?」
「どうしたのぉ?」
「急に大人しくなっちゃって。」
「しかもおチ○ポ今、ピクンってなったよね?」
「何? 感じちやったわけ?」
「僕、今負けてるううう!」とか思ってるの?」
「超ダサい。」
「自分でもそう思うでしょう?」



彼女がエーゲ海への旅行にこだわったのは、きっとこの為。
つまり、僕をこの金髪美女に会わせる為。
そして僕に認めさせるつもりだったのだ。
彼女と金髪美女の関係を…。



「あ、あ、紹介が遅れたわね。彼女は私のピア仲間なの。私達は、おち○ぽっいてるけど、あれは合法的にも結婚した仲だし、嫌いじゃないわ。勘違いしないでね。でも、その男としての嫌いなこと。」



彼女は何んの遠慮もなく、しれっと…。
僕にそう告白した。
僕は金髪美女の前で奴隷と紹介された恥ずかしさと、敗北感で
胸が一杯だった。
今まで感じたことのない寒さを感じた。
きつとこれが、孤独感なのだろう。
孤独感で、ついつい下半身に血が集まってゆくのが
自分でも分かった。



乳首勃ってるわー!
怖いのかなし(笑)

「ジエミーよ、
これからはミホ同様に、私にもご奉仕してもらおうから。
よろしくね?」

「ジエミーはね。
この国の女王様なの。
逆らったりしたら、その場で
首を切り落とされちゃうかもよ?
クスクス」

意外にも金髪美女は流暢な日本語を話した。
しかも、この国の女王様。
確かに観光パンフレットに載っていた女性とよく似ている。
僕はどう返事をしてよいか分からず、
ジェニーの大きなおチ○ポを見つめながら
ただただ、黙っていることしか出来なかった。





貴方、精神もビヨクなのね。
ワスワス

マジで情けないね〜？

キャハハハハ

ビクンッ！

ガクガク

ガクガク

ガクガク

「そんな心配しなくても大丈夫よ。我が国では死刑は廃止されているもの。何か他に罰を考えるわ。でも、そんなことより貴方…。さつきから、私のおチ○ポから目が離せなくなってるじゃない。いいのよ。」
「奴隷にしてください」って言えたら、おしやぶりさせてあげても…♡」

断れなかつた。

別に王女様のおち○ぽを
しゃぶりたかつたわけじゃない。

ただ…、

僕にとつては最愛のご主人様である彼女の…

目がとてもキラキラしていて、とても断れる状況じゃなかつた。

僕には…、

「奴隷にして下さい」

そう言うしか無かつた。

その言葉を口にした瞬間、

全身に悪寒とおぞまじさが駆け巡る。

僕は、今とんでもないことをしてしまった。

そう思った。

でも…、もう逃げられない。



見てもすぐにおかかったわ。
そのお千〇ポは、
マジのオナニー専用だつて。

やっぱマジね〜。
超ザコ(笑)

ふ〜ふ〜

ぶるんっ
ぶるんっ

「あは！
ね？言つたでしょ？ジエミー！
すぐに堕ちるつて…(笑)」
「すんなり堕ちたわね。
じゃあ、奴隷らしくしないとね。
まずは日本語でいいから奴隷宣誓書を書きなさい。
その小さなおチ〇ポで拇印押ししてよ。
それから勃起も射精も出来ないように
貞操帯を嵌めてもらおうわよ」

おチ○ポで拇印を押した奴隷宣誓書。
ビアン主様（※）による貞操帯調教。
その言葉だけでおチ○ポがビクンビクンしてしまふ。
これから自分がされることを考えると
おチ○ポが固く膨れ上がり、破裂しそうになる。
辛くて、辛くて、辛くて……。
悲しい幸せを……感じてしまった。

※ビアン主様の
|| レズビアンのカップル両名がご主人様の場合の尊称。

僕は廊下に、全裸のまま追い出された。

そして、氷が敷き詰められた洗面器を彼女から手渡される。

「これは何？」

「そう聞く前に何に使うものだか分かった。」

『勃起したおち○ポを突っ込んで、冷やすもの』

萎んだら、自分は氷で冷やすと強制的に萎む。
そういう意味だ。

「貞操帯の前に奴隷宣誓書。」

「そのおち○ポで拇印を押すんでしょ？
忘れないでね？」

「……はい」

彼女はそう言うのと紙とペン、それから男性用の貞操帯を

廊下に放り捨てて、ドアの鍵をかけた。

それから2時間近く、僕は全裸のままホテルの廊下で一人立ち尽くしていた。

一応、奴隷宣誓書も貞操帯も言われた通りにした。

2時間も立たされたおかげで、僕は外人客に裸を見られ、クスクスと笑われた。

ようやく部屋に入れてもらえた時には、
二人は十分に楽しんだ後だったように
僕は、その後処理を命じられた。

つまりは、王女様のペニスを口で…。



「えーっとなになに？」

- ・一切口答えしません。
- ・許可なしでオナニーしません。
- ・(アナニー・乳首オナニー含む)
- ・常に女王様とミホ様に最上位の敬意を払います。
- ・空気を読んで、行動します。
- ・(言われなくても自分から奉仕します)
- ・事後は、お掃除フェラ・お掃除クンニを必ずいたします。
- ・ふーん？ アンタ、これ守れるの？」

舐め

とっただか

飲み

苦いところ

だろ？

エグー

やだ

汚

(笑)



「守られるよなあ？
 守らないと、ミホのそばにいられないものなあ？
 ほらっ！
 もっと香を使って亀頭を舐めろよ。
 そこに精液がこびりついてんだろ？
 あっ！今逃げようとしたる。
 はいい、罰決定。
 良いと言うまでこの足は外さねえから。
 分かったな？マゾ」

問女の咽

喉の、それも

「ド」まで女の私の男根を

込められた

気が分はるん

厳し〜(笑)

クスクス

んんんんん

ゴクッ...

ゴクッ...

ゴクッ...



「へっ！
ジエミー、コイツ超ヘタレだよ？すぐ泣きを入れるし。
大体この奴隷宣誓書だつて、コイツが書いたのは名前と
冊印の部分だけでしょ？
内容はジエミーが書いたんだし（笑）。
ま、コイツはこんな文章書く能力なんて無いんだろうけどさ」



「ああ、そうそう。
貞操帯の鍵をよこさない。
私には完全服従してるから問題ないけど、
ジエミーにはまだ心の底からは服従してないでしょ？
だつたら鍵はジエミーに預かってもらいましょ。
オナニ〜したくなったらジエミーにオネダリするのよ。
いいわね？」



「射精した後って、どうしようもなくおしっこしたくなる時有るだろ？
なんかさ、今がまさにその時なんだわ。
とりあえず、飲んでくれる？
私、1回で相当出すから
零さず最後まで飲めよ。
零したらオナ禁期間伸ばすから。
いいな？」

ズクッ！

ちゅうづーづーづー

(紙)

ムシえやっ

ちゅと飲めな

クンクン



「クスクス。女性のオシッコなんて最高のと褒美よねえ？」

「お、マジか。
いいぞ。しっかり味わって飲め」

「~~~~~」

結局僕は、精液混じりのオシッコを1リットル近く飲まされた。貞操帯の鍵は王女様に預かられ、完全に逃げ場も無い。

王女様は公務があるらしく先にお城に帰ることになったが、その際彼女に『乗馬』を薦めているようだった。

僕は『自分が馬になるのなら、彼女のお尻の感覚を背中に感じられると内心喜んでいたが、期待は無駄に終わった。彼女の本物の馬に乗ったからだ。一方、僕には別の仕事を与えられた。』

まずは背中への彫り物。彼女が乗馬を楽しんでいる間、背中に指定された文字をお店で彫ってもらわなければならなかった。

そして彼女が乗馬を終えたら、泥で汚れたブーツへの：